
護られた首

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

護られた首

【Nコード】

N7771C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

お城にある古い井戸には不気味な言い伝えがあった。千秋はそれを興味本位で試してみた。すると異変が彼女を襲い。もう殆ど見られません。井戸のお話を。お城とかにはこうした話がよく残っています。

第一章

護られた首

この城には昔から言い伝えがある。二の丸にある井戸についてである。

この井戸は不思議な井戸で覗き込んでも顔が見える場合と見えな場合があるとされている。見える場合は何でもないが問題は見えない場合である。

見えない場合はその者は間も無く死ぬと言われている。それもどうしてかはわからないが首が落ちて死ぬと言われている。だからこの井戸を覗き込む者はいない。誰もそんな死に方をしたいと思わないからだ。

たまに酔っ払いや蛮勇を奮う者が覗き込むが見えるのは自分の顔だ。だからこれは単なる噂だという話もある。

それでもたまに自分で確かめようという者もいる。大槻千秋もそうした中の一人だった。

黒い髪をボブにした女の子だ。顔は少し丸みがありあどけない顔をしている。顔立ちこそは無邪気であったが性格は無鉄砲であった。無鉄砲な彼女だからこの井戸の話聞いて動かない筈がなかった。

「やってみようかしら」

「やってみるってあんた」

その話を聞いて友人の坂本美春は顔を顰めさせる。背は彼女よりも大きく赤がかった紙を肩を覆う長さで段で切っている。それを見ていると何か派手な印象を受けるが顔立ちはおっとりとしたものであった。二人は並んで立っている。その城の二の丸に向かって歩いていた。

「あの井戸覗き込むつもりなの」

「駄目かしら」

「駄目も何も」

美晴はその話を聞いて顔を顰めさせる。

「あなた死にたいの？」

「死ぬわけないじゃない」

千秋はにこりと笑ってそれに返す。

「噂よ、あんなの」

「だといいいけれどね」

美晴はそれを聞いてもまだあまりいい顔をしてはいない。いい顔どころか顔を顰めさせ露骨に彼女を咎めるようであった。

「大変なことになっても知らないわよ」

「美晴って本当に心配性ね」

そう返して笑う。

「そんなの有り得ないのに」

「有り得ないっていうけれどね」

美晴は口を尖らせて言葉を返す。

「見えなかったらやばいわよ」

「だから面白いんじゃない」

そう二人に述べる。

「見えなかったらどうなるか」

「首落ちたらどうするのよ」

「首が？」

千秋はその言葉に笑う。

「私の首がごとんとね。落ちるってどういうの？」

「そうして死ぬの」

「だからそれは噂じゃない」

それを笑って否定する。否定しながらも心の中でそれを確かめたいと思っっているのだ。だから今それをしようとしているのである。

「噂かどうか、ね。確かめたくもあるし」

「言っておくけれどね」

美晴は彼女にまた言った。

「首落ちたら死ぬのよ」

「それはわかってるわよ」

「どうだか」

聞き入れようとしないうちに千秋に懽然とした顔を見せてきた。

「わかったものじゃないわ」

「まあまあ」

「そんなに言うんだったらね」

美晴もいい加減折れてきた。しかしここで交換条件を出してきた。

「大事を取っておくのね」

「大事？」

「はい、あれ」

美晴は目の前の地蔵を指差してきた。見れば赤い前掛けをかけるれてお供え物を備えられている。目を閉じて静かに微笑んでいる。

第二章

「お参りしておきなさい。いいわね」

「何か心配性よ、それって」

「じゃあ首が落ちてもいいのね」

かなり怖いことを口にしてきた。

「ゴトリ、って」

「いや、それは幾ら何でも」

さしもの千秋もその言葉にはかなり閉口しながらも言つ。

「有り得ないわよ」

「話じゃそうなってるわよ」

否定しようとする千秋に対してまた返す。

「そうでしょ？」

「だからお参りしておけってこと？」

「そうよ。どうせちよつとの間でしょ？」

そう言葉を入れてきた。

「だからよ。いいわね」

「わかつたわよ」

渋々ながらそれに頷く。こうして千秋は御参りをした。その時地蔵の顔を見た。

「何かよくわからないけれどね」

にこりと笑って地蔵に対して言つ。

「首、守ってね」

そう述べて最後に一礼した。それから立ち上がり後ろに立って待っている美晴のところへと戻っていくのであった。

井戸の前に着いた。井戸の周りには何もなく白い城壁に囲まれた殺風景な場所だった。元々城というものは要塞であるから当然と言えば当然である。美晴はそこでまた千秋に声をかけてきた。

「はい、着いたわよ」

かなりぶつきらぼうな千秋にかける。

「いいのね」

「うん。じゃあやるわ」

「わかったわ。それじゃあね」

美晴に対して言う。

「見てみるわ」

「まあやってみて」

やはりぶつきらぼうな声で千秋に言う。

「御参りはしたしね」

「大丈夫だと思っけどね」

千秋は何気ない声でそう返した。

「幾ら何でもさ」

「止めたわよ、私は」

冷たい声で述べる。

「後はどうなっても知らないから」

「とにかく覗いてくるわ」

遂に前に出た。井戸の前に向かう。

そつと井戸を覗き込む。覗き込むとそこには。

何も映ってはいなかった。それを見て首を傾げたがその姿も映ってはいなかった。

首を傾げさせたまま美晴のところに戻る。戻ってから言うのだった。

「見えなかったわ」

「ちよつと」

それを言われて美晴も身体を少し引かせてきた。

「それってまずいわよ、本当に見えないなんて」

「たまたま井戸の奥が暗くて見えなかっただけよ」

にこりと笑って述べる。

「気にしない気にしない」

「何処までもお気楽ね」

あまりにも能天気な千秋に呆れてしまう。

「まあお地藏様が守ってくれるだろうけれど」

「期待してるわ」

信じていない声であった。美晴にもそれがはっきりとわかる。

「そんなことないだろうけれど」

そう言いながら井戸を後にする。井戸は何も語ることなくただそこに残っていただけであった。

それから数日後。そのことを殆ど忘れていた千秋に異変が起こるのであった。

学校に行く途中であった。何も考えずに美晴と二人で歩いていると石に躓いてしまった。

「痛たたた・・・」

「あんた何してんのよ」

美晴が呆れた声で千秋に声をかける。

「石に躓いて」

「仕方ないわね。起きて」

「うん」

その時だった。上から何か落ちてきたのであった。

千秋は起き上がった。起き上がった丁度その時にそれは彼女のすぐ前に落ちてきた。見ればそれは鉄筋であった。もう少しで彼女の頭に落ちてくるところであった。

「何、これ」

「上からだから」

見上げると上でビルの工事中であった。それで鉄筋が誤って落ちてきたらしい。千秋はその鉄筋を見て呆然としている。美晴が上を見ると丁度工事をしているところであったのだ。

「何かの間違いで落ちたみたいね」

「危なかった・・・」

「井戸のあれね」

美晴は鉄筋を見下ろしながら呟いた。

「これって」

「じゃあ本当だったんだ」

千秋は呆然と鉄筋を見下ろしながら言った。

「あの井戸のことって」

「よく助かったわね」

美晴はそんな千秋に対して言う。

「もう少しで」

「頭潰れて………ってまさか」

「本当に首がなくなってたわよ」

美晴は言う。

「もう少しで」

「助かったわね」

「うん。けれどこれって」

千秋はここで気付いた。

「助かったのはやっぱり」

「御地蔵様のおかげね」

「うん」

千秋は美晴の言葉に頷く。

「助かったわ。あと一歩つてところだったけれど」

「そうね。死ぬところだったわよ」

「最初は信じてなかったわよ」

「こう言った。」

「まさか。こんなことって」

「あるのよ」

しかし美晴はそう千秋に言う。

「こういうことってね。世の中には」

「ええ」

「わかったわね」

「わかりたくなかったわよ。こんなことって」

自分の頭に手をやる。そうして本当に頭があることを確かめる。

「あるわ」

「そしてそういうこともあるのよ」

今度は千秋が助かったことについて言う。

「怖いこともあるけれど助けてくれるものもあるのよ」

「そうなの。ところでさ、美晴」

「何？」

「随分物知りだけれど何でそんな言葉知ってるの？」

「教えてもらったのよ」

美晴は顔を強張らせながらもぽつりと述べた。

「御婆ちゃんにね」

「凄い御婆ちゃんね」

千秋は今度はそのことに驚いていた。何か朝から驚くことばかりだと思いつつながら。

「それはまた」

「そうかしら」

「そうよ。けれど」

そのうえで述べる。

「おかげで助かったわ。今度御礼を言わせて」

「ええ、いいわよ」

ようやく少しにこりと笑うことができた。何はともあれ千秋は命を取り留めた。それから彼女は御地蔵様と美晴の祖母を非常に大切にした。その理由は井戸にあったのであった。

その井戸はまだ残っている。しかしもう覗き込む者はいない。誰も首がなくなるような無残な死は遠慮したいからである。

護られた首

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771c/>

護られた首

2009年6月23日10時34分発行